

早稲田大学審査学位論文
博士（スポーツ科学）
概要書

苗族武術の観光化変容

The Touristic Transformation of Miao Martial Arts

—湖南省湘西土家族苗族自治州勾良村を事例として—

—“Gou-liu” Village in Tujia and Miao Autonomous Prefecture of Xiangxi as an
Example—

2011 年 1 月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科

馬 晟

Ma Sheng

研究指導教員： 寒川 恒夫

近年、中国改革開放政策や少数民族地域観光開発など中国政府の政策によって湖南省湘西土家族苗族自治州（以下、湘西地域とする）における観光開発が進展している。こうした、観光開発の進展はかつて文化大革命時に禁止された祭礼や伝統行事などを復活させるきっかけになっている。一方で、観光開発によって復活した伝統行事が観光に適した様式へと変容する実態がみられる。また、地方政府や観光業者が湘西地域の観光開発のため、漢民族とは異なる苗族の歴史・文化を観光の目玉として売り出し、多くの観光客と経済利益を得ようとしている。

こうした現状を苗族の民族スポーツから理解するために、本研究では湘西地域の勾良村における椎牛祭に注目する。そして本研究では椎牛祭にみられる苗族伝統武術の演武に焦点をあて、中国政府および観光業者による観光開発が苗族伝統武術をいかに観光資源として再構成しているのかを明らかにした。結果として次のことが明らかにされた。苗族の武術は漢民族や歴代王朝との長い戦いの歴史の中で形成されたもので、その一端が宋代の『溪蛮叢笑』や明・清代の『百苗図』に窺うことができる。その存続は民国時代まで確認されるものの、中華人民共和国成立の後には、文化大革命の時期に、武術が封建の遺物とみなされて排斥されたことにより、公の場での伝承は途絶え、密かにシャーマンによって伝えられてきた。変化は1970年代の改革開放政策によってもたらされた。文化大革命が否定した武術を発掘する事業が1979年から開始され、それを受けて湘西地域でも、湘西土家族苗族自治州体育運動委員会武術発掘整理チームが組織され、その成果が『苗族武功』としてまとめられたのである。時を同じくして政府が展開した民族文化を資源とする観光振興策は、湘西地域の椎牛祭を観光化した。椎牛祭において武術が上演されることが決定されると、上演用の武術の構成が考案され、当時自治州体育局に勤めていた秦可国氏により苗族伝統武術が創作されるに至った。観光客の視線を意識した苗族伝統武術は、その多くを漢民族武術（国際競技として展開する国家武術）の技法に模倣することで構成された。村には次世代の演技者を育てる天下鳳凰武術学校が開設されたが、そこで教授される内容も苗族のものより国家武術のものが多くなっている。椎牛祭の武術は苗族伝統武術と称するものの、シャーマンのアクロバティックな武術（難技）を除けば、民族衣装を着した苗族が漢民族の武術を演じるショーであるといえる。

中国政府、地方政府、民間組織、地元の積極的な相互関係と開発意欲によって苗族の武術は苗族伝統武術という名のショーと化した。民族観光開発という国家の政策は少数民族の武術を変容させる大きな原動力であり、武術の競技化と見せ物化が他の地区においても今後進行することは容易に予想される。